



筑紫女学園大学リポジット

An Analysis of the sensible colors and the discernment about Japanese Traditional Accustomed Colors

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-02-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡本, 文子, OKAMOTO, Ayako メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/735

慣用色名に関する認識度と認識色の分析

岡本文子

An Analysis of the sensible colors and the discernment
about Japanese Traditional Accustomed Colors.

Ayako OKAMOTO

1. 緒言

現代では、これまでデザインの一要素として未分化の扱いを受けていた色彩の分野が、次第に独立した一分野として分化しつつある。勿論デザインと色彩とは相乗効果や対比効果などからも、単純に切り離せない関係にあることは言うまでもないが、現代社会の様相は、多様化がますます進行しており、色彩の担う役割も多岐にわたり、個人的なものから、都市計画に至るまで、その色彩の持つ心理的作用の重要性も認知されてきている。近年生活のさまざまな分野で必要性を唱われているユニバーサルデザインにおいても色彩の担う役割は大きいと言えよう。

しかしながら、日常生活においては、あまりにもあたり前のように接しているために、色彩を系統的に学ぶ機会は多くはない。最近カラーコーディネーター検定や色彩検定に興味を持つ学生も増加しつつあり、色彩の知識に対する関心は高まってきている。そこで、色彩の名前を取り上げてみると、色彩の名前は色を伝達する手段であり、日本工業規格（JIS）では系統色名のほかに慣用色名を規定している。「慣用色名」とは、顔料や染料などの原料名や、動物、植物、鉱物など、その色から連想されるものの名前を借りて付けられた色名を

いうが、日常生活において、イメージの伝達的手段として、相方に共有する知識やイメージがなければ、円滑に、また正確にイメージを伝達することはできない。この「慣用色名」は実際に慣用的に使われている名前であるが、文化的に見ると、日本の伝統色も包括しており、歴史を経て西洋から移入されたものなど、そこには文化の発生や伝達、移入や継承といった現象も見えてくる。

それでは、この「慣用色名」について現代の若者層では、どの程度他者と共有する知識と成り得ているのだろうか。ここでは、「慣用色名」に関する認識度と認識する色の分析を試みることにした。また、分析を通してどのような色をどの程度明確に把握しているかについて知ることは、文化としての慣用色の現代における継承の様相を検証する手掛かりでもあり、今後どのような方向を辿る傾向にあるかを探る端緒に成り得ると考える。

2. 方 法

慣用色名に挙げられた各色は全く固定した色ではなく、多少の幅を持つものであるが、各々の色名から固有の明確なイメージが持てなければ、その色を認識しているとは言えない。慣用色名に挙げられた色を知っているかどうかばかりでなく、そのイメージが共有するものと成り得ているのかも知るため、コンピュータグラフィックスの色編集を用いて、イメージした色の要素分析を行った。

2. 1 対 象

18歳～19歳の女子短大生50名

2. 2 調査内容

- ・ JIS 慣用色名一覧表より、「色彩と配色の基礎知識」および「カラーコーディネーター検定試験3級テキスト」を参考として、50色を抜粋し、番号と色名のみ記載したものを配布した。

- ・ 1～50番の慣用色名について、明確にその色をイメージすることができるかどうかを答えることとした。1～50番の慣用色名は次の通り（表1）。
- ・ イメージすることができる色について、コンピュータグラフィックスソフト「UP シリーズ MODA」の色編集を用いて、イメージした色を色パレットより選択もしくはカラーシステムによる作成を行うが、その際、システムはHSVを用い、イメージした色、つまり認識色の色相、彩度、明度の分析値を記入することとした。この場合、色相は $0^{\circ} \sim 360^{\circ}$ 、彩度は $0^{\circ} \sim 100\%$ 、明度は $0^{\circ} \sim 100\%$ の数値で表される。なお、色相の 0° と 360° は同色相となる。

表1 JIS 慣用色名

1	鶉色(ときいろ)	26	レモンイエロー
2	カーマイン	27	カーキ
3	茜色(あかねいろ)	28	セピア
4	蘇芳(すおう)	29	オリーブ
5	ボルドー	30	鶉色(ひわいろ)
6	牡丹色(ぼたんいろ)	31	萌黄(もえぎ)
7	マゼンダ	32	鶯色(うぐいすいろ)
8	ワインレッド	33	チャコールグレイ
9	臙脂(えんじ)	34	エメラルドグリーン
10	キャロットオレンジ	35	青磁色(せいじいろ)
11	黄丹(おうに)	36	ピリヤードグリーン
12	柿色(かきいろ)	37	新橋色(しんばしいろ)
13	肌色(はだいろ)	38	浅葱色(あさぎいろ)
14	杏色(あんずいろ)	39	納戸色(なんどいろ)
15	蜜柑色(みかんいろ)	40	ターコイズブルー
16	小麦色(こむぎいろ)	41	シアン
17	鶯色(とびいろ)	42	スカイブルー
18	栗色(くりいろ)	43	藍色(あいいろ)
19	チョコレート	44	瑠璃色(るりいろ)
20	ページユ	45	藤色(ふじいろ)
21	らくだ色	46	江戸紫(えどむらさき)
22	山吹色(やまぶきいろ)	47	ラベンダー
23	アイボリー	48	ライラック
24	クリームイエロー	49	モーブ
25	刈安色(かりやすいろ)	50	銀鼠(ぎんねず)

2.3 分析

- ・ 1～50番の慣用色名について、それぞれの回答したH.S.Vの値を表にまとめ、(表2)回答1～50について分析を行った。
- ・ 同じく1～50番の慣用色名について、回答1～50の分析値をもとに、1～50番の慣用色名別色表を作成し、分析表とともに検証に資することとした。

3. 結果

3.1 慣用色各色の分析結果

1. 鶺色(ときいろ)...(図1)

回答率は34%であるが、回答した色を見てみると鶺色とは全く異なる色を選択もしくは、作成している例もあり、実際の鶺色に近い回答は4%、やや近い色を含めても8%とさらに低い。鶺色の「鶺」は現代の日常生活の中では目にすることが無く、馴染みの薄い鳥であるため、イメージすることができないと考えられる。

2. カーマイン

回答率は16%と低く、さらに色表から判断すると12%程度となる。カーマインは染料名で、油彩の趣味や美術に関心がある場合は認識できるが、知識として色を覚えていなければ、名前からイメージすることは難しい。

3. 茜色(あかねいろ)

回答率は60%と、伝統色系では高い方である。選択もしくは作成した色の色相にはややバラツキがあるものの、彩度、明度は高い色を示している。茜は植物染料であるが、夕焼けを「茜色の空」と表現するなど、例えにも使われるため、茜草を知らなくてもイメージできる。

4. 蘇芳(すおう)...(図2)

日本の伝統色系の色であり、染料名に由来している。回答率は10%と低く、色表を見ると、さらに認識度は4%程度である。

表2 H.S.Vの値

番号	H	S	V
1	300	86	77
2	300	38	73
3	300	35	58
4	11	80	53
5	269	39	38
6			
7	330	38	79
8	270	59	79
9			
10	270	59	79
11			
12	30	79	100
13	270	38	79
14	300	100	58
15	300	51	91
16	270	59	79
17	270	80	79
18	270	44	97
19	300	54	73
20	270	59	79
21	270	65	93
22	240	73	56
23	240	58	79
24	270	59	79
25			
26	210	59	58
27			
28	261	68	58
29	286	80	59
30	240	100	79
31			
32			
33			
34			
35	270	59	58
36	269	80	46
37	210	59	58
38			
39	210	100	79
40	232	90	50
41	240	59	79
42	210	100	38
43			
44			
45			
46	270	72	56
47			
48			
49	210	100	58
50			

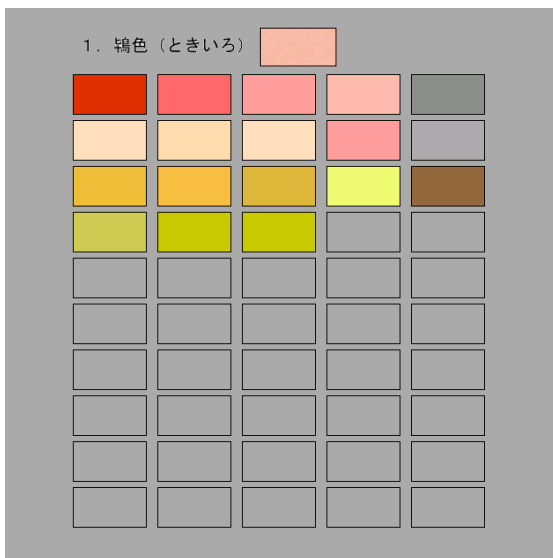


図 1

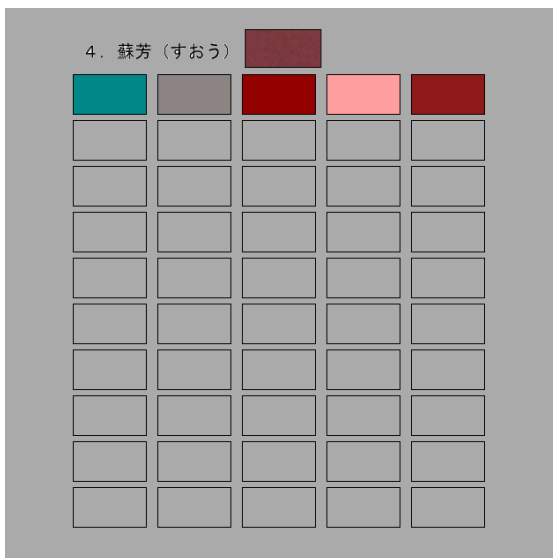


図 2

5. ボルドー

同じワインの色でも、ワインレッドに比較すると回答率は32%と低く、色相、彩度、明度にもバラツキがある。「ボルドー」という名前を聞いた経験はあっても、知識として正確に把握されてはいないと考えられる。

6. 牡丹色(ぼたん色)

牡丹色の「牡丹」は伝統色の中でも比較的好く耳にする花名であり、回答率は60%と低くないが、選択もしくは作成した色（以下色表の色と示す）の色相には実際の牡丹色とはやや異なるものも多く、他の色と区別して色のイメージを伝達するという色名の役割から考えると、認識度は低いと言わざるを得ない。

7. マゼンダ...(図3)

回答率は28%と低く、色表からは、さらに認識度が低いことが分かる。「マゼンダ」は初等・中等教育の美術では学習している筈であるが、日常の家庭生活の中では目にする機会が少ないことが影響するためか認識度は低い。

8. ワインレッド...(図4)

回答率は98%と高く、色表のパラツキも比較的少ない。しかし、本来紫みの色ではないが、回答は330°前後の紫みの色相が多く、回答率は高いが正確な把握とは言い難い。

9. 臙脂色(えんじいろ)

伝統色系で、染料を由来とする色名なので回答率は54%と高くはないが、染料名の伝統色の中では高い方である。色表を見ると、実際の濃い紫みの赤に比べて、明度、彩度を高めに選択もしくは作成している。

10. キャロットオレンジ

最も回答率の高い色名の一つで、98%である。色相、彩度、明度共にバラツキが少なく、ビビットな色ではあるが、日常生活の中で目にしたり、接したりしやすい色と言えよう。

11. 黄丹(おうに)

伝統色系で、奈良時代からある古い色名だが、衣服令に由来する現代では馴染みの薄い色名で、回答率は低い(42%)が、日常生活や会話では接する機

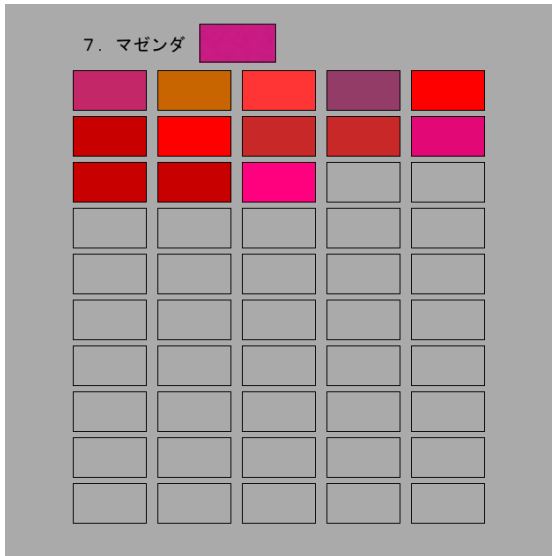


図3

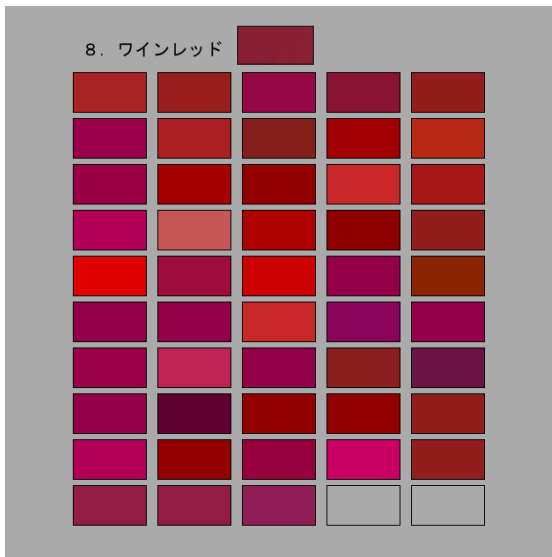


図4

会の乏しい色名なので色表のバラツキはむしろ当然と言えよう。

12. 柿色(かきいろ)

94%と回答率は高く、色相のバラツキは少ない。色名が具体的で身近であるため共通理解を得やすい。

13. 肌色(はだいろ)

回答率100%で50色中最も回答率が高い。色相、彩度、明度のバラツキも少なく、共通理解が高いと言えよう。膚色は実際よりも明るい色に記憶される傾向にある。

14. 杏色(あんずいろ)...(図5)

回答率は46%で高くないが、色表には JIS 慣用色よりも彩度の高いものもあるものの、ある程度の共通理解がある。「杏」そのものの認識度が反映していると考えられる。

15. 蜜柑色(みかんいろ)

「蜜柑」が一般的に親しみがあるものなので回答率は高く、バラツキも少ない。

16. 小麦色(こむぎ色)

回答率は94%と高く、小麦の粉の色を知らなくても肌の色として認識されているため、化粧品の色見本などで日常的にも目にしており、共通理解も高い色名の一つである。

17. 鶯色(とびいろ)...(図6)

伝統色系の色名の中でも、回答率6%と最も低い。さらに色表の色も実際の鶯色とは異なっており、認識度は全くないと言える。

18. 栗色(くりいろ)

現代でもよく耳や目にする色名であり、回答率は高く、92%となっている。しかし、彩度、明度にはバラツキがあり、イメージの幅が広く、認識度が高いと言い切れない。

19. チョコレート

回答率は92%と高いが、色相はおおよそ0°とおおよそ30°付近に二極分化して

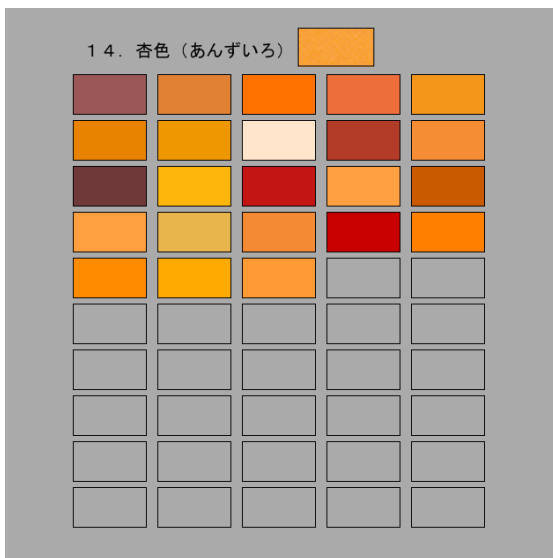


図5

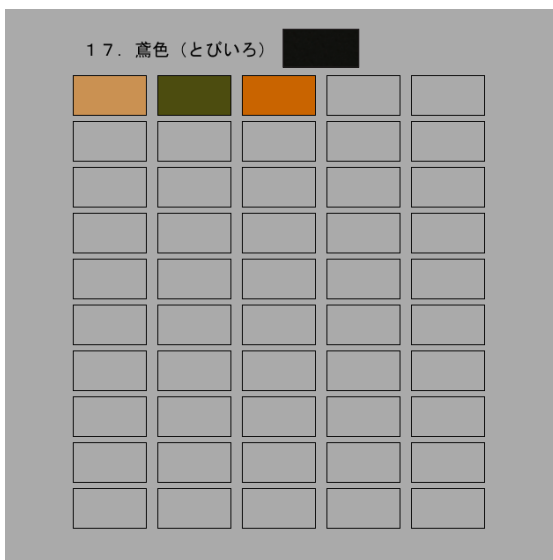


図6

おり、明度より彩度にバラツキが多い。濃色では彩度にバラツキが出る傾向にある。

20. ベージュ...(図7)

回答率は96%と高く、一般的に耳にしたり、目にする機会の多い色名の一つである。色相は30°前後でバラツキは非常に少ない。しかし彩度、明度にはバラツキがあり、認識するイメージに幅があることが示されている。

21. らくだ色

回答率は74%で、高い方である。色相は30°が多く安定しているが、彩度にバラツキがある。明度はややバラツキはあるものの60°前後が多い。実物のらくだを見る経験は少なく、認識度が高いのは、経験より色のイメージを共有していると考えられる。

22. 山吹色(やまぶきいろ)

「山吹色」は初等・中等教育の美術教材である絵の具の色で慣れ親しんだ色であり、回答率は94%と高いが、色相、彩度、明度共にバラツキが見られ、基本色の中間に位置する色を認識したり、記憶することは難しいことが示されている。

23. アイボリー...(図8)

象牙の色に由来しているが回答率は34%と低く、色表ではいくつかの勘違いと思われる回答もあり、その由来よりも、色のイメージで記憶されている。そのため色相もバラツキがあり、正確には把握されていない。

24. クリームイエロー

94%と回答率も高く、色相、彩度、明度のバラツキも非常に少ないことから、認識度も高く、共通理解を持っていることが示された。回答者47名中20名が色相、彩度、明度共に全く同じ数値を記入している。やはり、絵の具の色であり、色相は基本色に属している。

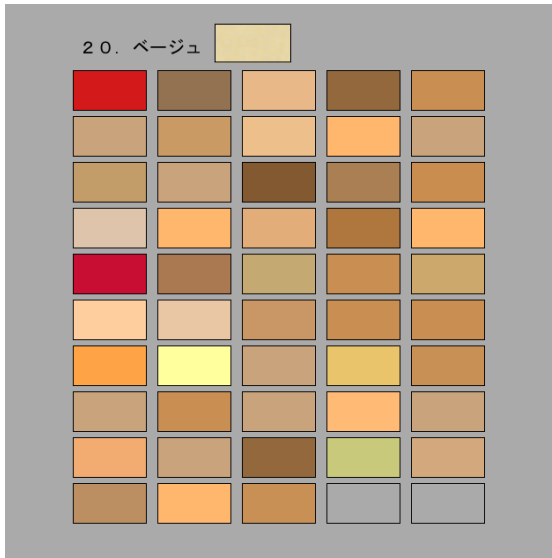


図7

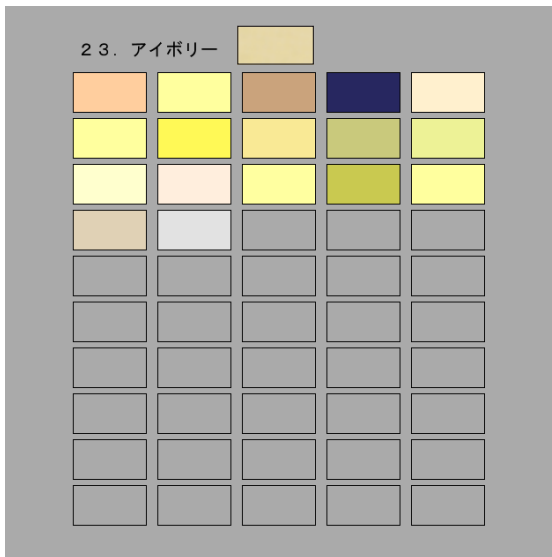


図8

25. 刈安色(かりやすいろ)...(図9)

回答率は非常に低く10%である。天然染料系の伝統色名は認識度が低い傾向にある。

26. レモンイエロー

絵の具の色であり、回答率も高く98%である。彩度にはややバラツキがあるものの、色相と明度には殆どバラツキが無く、認識度も高いと考えられるが、JIS慣用色では色相が「緑みの黄」であるのに対し、回答では「黄」に偏っており、クリームイエローと黄色の中間の色と把握されている。

27. カーキ

「カーキ」はインドで「土ぼこり」という意味であり、色名は聞き慣れた名前であるため回答率は92%と高いが、色相、彩度にバラツキがあり、正確に把握されてはいない。

28. セピア...(図10)

有機性顔料の名前であることはあまり知られていないが、歌詞や文字など耳や目にする機会もあるためか、回答率は86%と高いものの、実際のセピア色に該当するものは少なく、全くの勘違いも色表には見られる。

29. オリーブ

回答率は66%と低くはないが、色相、彩度、明度共にバラツキがあり、イメージが明確ではなく、正確な把握はできていないことが示されている。実際の認識度は低い。

30. 鶺鴒色(ひわいろ)

「鶺鴒」という鳥に馴染みが薄いためか、回答率は最も低く、8%である。また、伝統色でもある。色表でも、実際の鶺鴒色とは異なっており、認知度は0に等しい。やはり、基本色を選択する特質が出ている。

31. 萌黄(もえぎ)

「萌黄」は古くからある伝統色名で、葱(ねぎ)の萌えである色からきており、色相は黄緑であるが、回答率も低く、26%、色表でもJIS慣用色の萌黄に該当する色は見当たらない。つまり認識度は0に等しい。

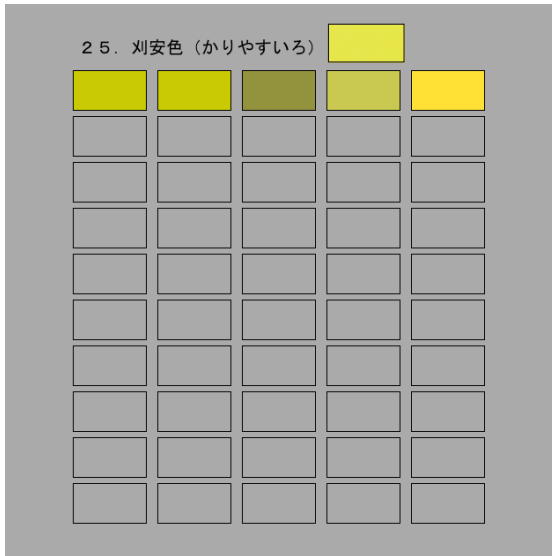


図9



図10

32. 鶯色(うぐいすいろ)

伝統色系の中では80%と、回答率は低くないが、色相、彩度、明度共にバラツキがあり、イメージに幅がある。伝統色とは言え、現代でも耳や目にする機会も多い色名であり、それだけにイメージが幅広く捉えられている可能性もある。

33. チャコールグレイ

「消炭色」とも言い、黒に近いグレイであるが、色表で見ると、明度50~60%の実際のチャコールグレイよりも明るい色を多く示している。回答率も44%とやや低いが、認識度はさらに低い。

34. エメラルドグリーン...(図11)

回答率は94%と高く、彩度にはバラツキが多いが、色相にはあまりバラツキが見られない。「エメラルドグリーン」の色相は緑で、基本色を選択しやすい傾向と一致する。

35. 青磁色(せいじいろ)

「青磁」は現代でも目にすることはできるが、古くからある伝統色で、回答率は28%と低い。JIS 慣用色では色相は緑に属するが、回答では青緑系の色相が多く、名前の青から想像していると考えられ、彩度、明度はバラバラで、実際の認識度はさらに低い。

36. ビリヤードグリーン

ビリヤード台のフェルトの色からきており、名前から容易に推測できるが、回答率は低く、46%である。色相、明度には比較的バラツキは少ないが、彩度にややバラツキがある。

37. 新橋色(しんばしいろ)...(図12)

「新橋色」は大正時代に新橋芸者の間に流行した着物の色で、伝統色であり、回答率は8%と極めて低い。色表の色も実際の新橋色とは異なっている。

38. 浅黄色(あさぎいろ)

古くからの伝統色で、明るい青緑を指すが、彩度、明度の幅は広い。回答率は28%と低く、色相はバラバラで、伝統色であることと、基本色と基本色との

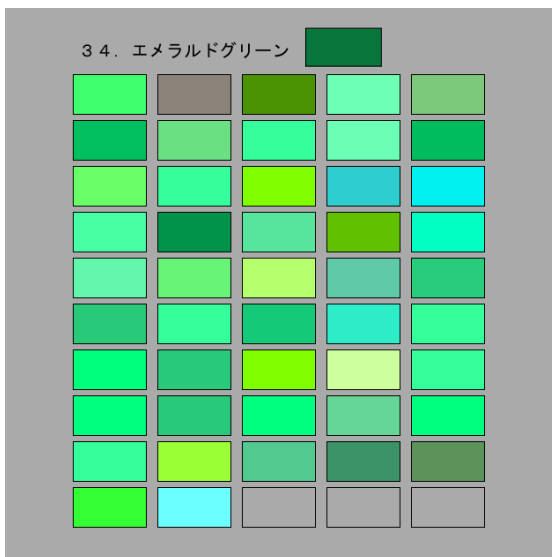


図11

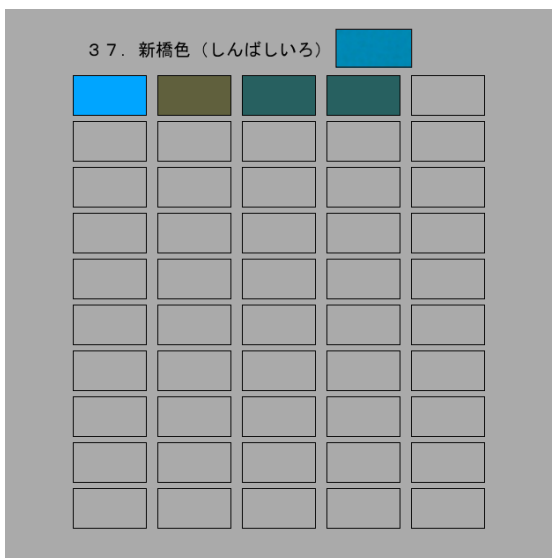


図12

中間色の記憶が再現しにくいなど、認識度が低い要件が重なっている。

39. 納戸色 (なんどいろ)

伝統色というばかりでなく、「納戸」という言葉の意味からは連想し難い色なので、回答率は12%と極めて低く、しかも色相はバラバラで、いづれも実際の納戸色とは異なっており、認識度は無いと言える。

40. ターコイズブルー...(図13)

回答率は66%と低くはないが、色相、彩度共にバラツキがあり、実際のターコイズブルーは明度の高い緑みの青であるが、色相は青に偏っており、彩度の高すぎる色や明度の低い色が混在している。したがって、認識度は低くなる。

41. シアン

初等・中等教育の美術では学習している色であるが、回答率は16%と低い。シアン系の色素に由来しているため、知識になく、名前から想像することもできないと考えられる。色表から見ると認識度はさらに低い。

42. スカイブルー

名前から容易に想像ができるため、96%と回答率は高い。色相、明度は大きく離れてはいないが、彩度には高すぎるものも含まれている。

43. 藍色(あいいろ)

天然染料系の伝統色だが、絵の具の色でもあり、諺などでもよく知られているため、回答率は90%と高く、色相も基本色に属するため、認識度も高い。ただ彩度にはややバラツキがあり、幅広く捉えられている。

44. 瑠璃色(るりいろ)

伝統色であり、回答率はやや低く、52%である。実際の瑠璃色の色相は「紫みの青」であるが、色相にはバラツキがあり、ここでも、基本色を選択する傾向が見られる。また、曖昧な記憶によるためか、実際の認識度は低くなる。

45. 藤色(ふじいろ)...(図14)

伝統色の中では、68%の回答率は低くはないが、色名が具体性のある花の色なので、イメージはできるが、色相で藤色に該当するのは回答の約3分の1程度である。やはり、基本色と基本色との中間の色であるので、色表の色相は基

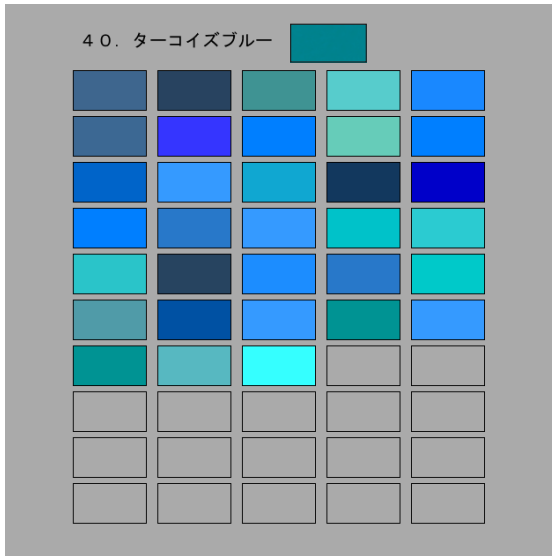


図13



図14

本色に偏っている。

46. 江戸紫(えどむらさき)

武蔵野に生える紫草を原料として、江戸で染めたのでこう呼ばれる「江戸紫」は伝統色であるが、具体的に色名に色相名が示されているためか、回答率は72%と比較的高い。実際の「江戸紫」は「青みの紫」であるが、色相は300°に偏っている。

47. ラベンダー...(図15)

回答率は高く、「藤色」と比較すると、日本の伝統的な花よりも洋花の方が、現代人にとってはむしろ馴染み深いものとなっている現状がうかがえる。色相は紫(300°)に偏ったものも見られ、彩度、明度もバラバラで、実際の「ラベンダー」に該当する回答は少なく、正確な把握には成り得ていない。

48. ライラック...(図16)

同じく洋花でも、「ラベンダー」に比べて、「ライラック」は馴染みが薄く、回答率は10%と極めて低い。さらに、色表を見ても実際の「ライラック」とは異なっており、認識度は0に等しい。

49. モーブ

花の名前としては、日本名で呼ばれることが多いためか、回答率は極めて低く、8%となっており、さらにほぼ正確に把握できたのは50名中1名であった。

50. 銀鼠(ぎんねず)

伝統色としては、名前に色名が入っているためか、50%と、高い方で、彩度にバラツキは少ないが、明度にはバラツキあり、曖昧な把握であることがうかがえる。

4. 結論

以上の調査、分析を通していくつかの慣用色名の認知に関するいくつかの特質が提起された。

まず、これは予測されたことではあるが、古くからある日本の伝統色の認識

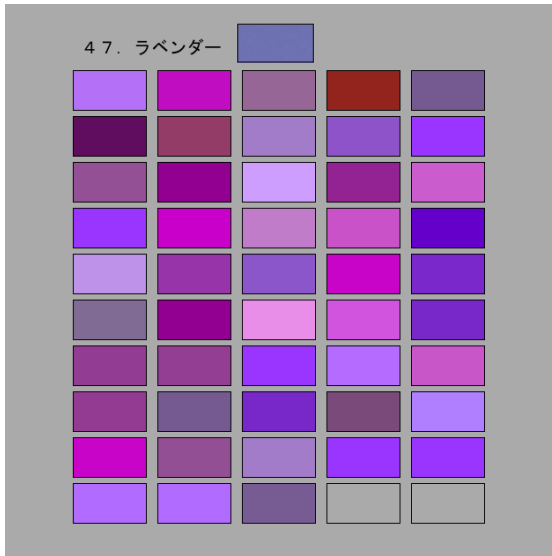


図15

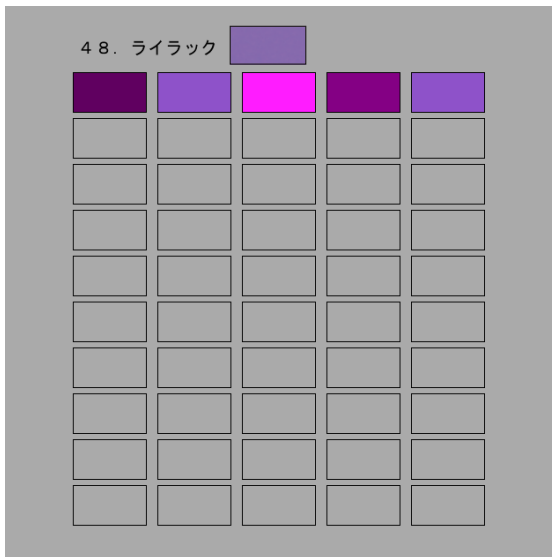


図16

度が低いことである。これは現代社会の生活の中では、洋装で、洋風の居住形態も多く、洋服やインテリアの色を伝統色名で表現することに違和感がある。伝統色名を記憶する機会としては、和服や和装を通してが多いと考えられ、そういった機会はますます少なくなっている。

回答率が低かった慣用色名は「鶯色」6%、「鶺鴒色」8%、「新橋色」8%、「モーブ」8%、「仮安色」10%、「ライラック」10%、「蘇芳」10%となっており、これらの認識度がさらに回答率より下回るのは前述の通りである。認識度の低い慣用色名に共通する事由は、伝統色の中でも馴染みのない鳥の名前、染料に由来する名前が挙げられ、カタカナ表記の慣用色名では、馴染みのない花の名前、(西洋から移入された草花を見る機会や名前を知る機会がないと想像できない。)意味の分からない外国語の表記のものなどが挙げられる。カタカナ表記の慣用色名にも認識度が低いものが認められ、また、回答率が中低度であっても、色表の色がJIS慣用色の色とは異なり、実際の認識度が極めて低いものも認められた。例えば、「ターコイズブルー」や「チャコールグレイ」など。

逆に回答率が高かったのは、「肌色」100%、次いで「ワインレッド」98%、「レモンイエロー」98%、「キャロットオレンジ」96%、「ベージュ」96%、「スカイブルー」96%、「ラベンダー」96%、の順となっている。

しかし、回答率はあくまでも回答した数であって、色表にも見られるように、実際の慣用色とは異なる色を選択もしくは作成している場合も見られ、実質的な認識度が回答率よりも下回る現象はどの慣用色名にも認められ、さらに、回答率の低い色名の認識度が下回る率の大きさは顕著であった。

総じて回答率の高い慣用色名に認められる特質として3点が挙げられる。

まず、初等・中等教育で美術教材に用いられる絵の具の色の認識度は高く、イメージを共有する共通理解ができていると言えよう。絵の具の色の認識度が高いことは、初等・中等教育における教材のネーミングの重要性を物語っている。日本の伝統色名が今後継承されていくかどうかにも密着に関連していると考えられる。もしも、将来、絵の具箱から日本の伝統色名が無くなってしまっ

たら、日本の伝統色名はますます遠いものになってしまうに違いない。

次に回答率が高い要素として、色名の由来となったものを実物として知っている場合、想像が容易であるため、色相や彩度、明度の度合いを意識せずに答えることができるが、具体的な実物の色を再現することは意外に個人差があるためか、HSV に差異が出る傾向が見られた。それに対して、「キャロットオレンジ」や「らくだ色」のように、日常生活の中に実物としてよりも、イメージを色名として共有している場合、生活用品などで抽象的に色として目にする機会があるような場合、HSV に差異が少ない傾向にある。

3点目として、これは、回答率の高い慣用色名に限ったことではなく全ての慣用色名に関わることであるが、本研究でも調査は、慣用色名の「名前」を認識しているかどうかと併せて、認識している場合のイメージした色の色相、彩度、明度の分析値を記する方法で行った。色相については、特定の色相に偏らないよう配慮したが、選択もしくは作成された色の色相について、次のような特質が認められた。それは、記憶されたイメージを引き出して再現する際、基本色、特に赤、黄、緑、青、紫を選択する傾向があることである。前述した「レモンイエロー」のように、回答率は高く、回答した色に共通性があり、イメージの共有度は高いが、JIS 慣用色では「緑みの黄色」であるのに対し、回答では色相の数値は「黄」を表している。このような例が「藤色」や「藍色」など回答率の高い色名ばかりでなく、回答率の低い色名にも同様に見られた。従って、実際の色が、基本色と一致している場合、選択もしくは作成した色の共通性が高い。このことは、微妙な色の差異を区別する能力はあっても記憶からイメージを引き出す際には基本色に偏り易い傾向を示している。

前記のような特質から、色彩を区別する能力と再現する能力には差異があると推されるが、それを検証するには、更に詳細な調査を行う必要がある。また、今後の慣用色名がどのように文化として継承されていくのかについては、本研究において、現状の一端を知ることはできたが、更に、本研究から提起された諸相から慣用色名を分類して調査を行うことによって、より全体像を明らかにすることができると思う。それは色名という一つの文化を運命づける要因を

明らかにすることに他ならない。また、本研究で触れ得なかった要因の一つに、現代の社会生活の中では、慣用色名と生活がどのような結びつきを持っているか、どのような色名を情報として受容しているか、が挙げられる。今後の課題として、これらをさらに検証していきたい。

資 料

- ・ カラーコーディネーター検定試験テキスト 東京商工会議所

参 考 資 料

- | | | |
|--------------|-----------|------|
| ・ 日本色彩大鑑 | 松本 宗久 | 河出書房 |
| ・ 色彩と配色の基礎知識 | 有本 祝子 | 永岡書店 |
| | 岡村 美知 | |
| ・ 色名小事典 | 財団法人日本研究所 | |
| ・ 奇妙な色名辞典 | 福田 邦夫 | |